HATSUNE

DEG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＡＴＳＵＮＥ

【Ｎコード】
Ｎ７３４８Ｋ

【作者名】
ＤＥＧ

【あらすじ】
初音ミクを買ったあるクリエイターの話。（この話ではミクが実物として登場します）

（前書き）

ネタの書きなぐりなので構成やなんかが荒いですが、ご了承下さい。

きっかけは気分転換だった。元々音楽が好きだったのと、受験勉強ばっかりで気が滅入りそうだったから、ずっと貯めてた自分の小遣いを思い切りはたいて買ったのが始まりだ。

「これで電源が入れば……と」

俺の部屋に立って機械音を鳴らすのは、１５０ｃｍ程度の人型人形。ツインテールの長い髪は水色で、人形といっても外見は完全に人間の女の子なのが特徴だ。これが最近じゃ有名な『ボーカロイド』ってやつだけど、届いた時はびっくりした。本当にロボットなのか疑いそうだ。

「お……」

「プィーン――」

起動音と共に青い目に光が宿る。このタイプはナンバー０１の割と初期型で、『初音ミク』という名前らしい。電源が入ると同時に、キョロキョロと周りを見回す。

「ァーァー……あ、マスター」

「マ、マスター？」

いきなり機械っぽいカクカクした声でそう言われ戸惑うが、取り扱い説明書に人間をそう呼ぶ機構が記載されていたのを思い出す。

「はじめまして、初音ミクです。製造コードは０１－Ｈ１２５７１４です」

「あ、あぁ。俺は……山田」

「はい、ヤマダですねマスター」

オーソドックスにも程がある自分の苗字を名乗る。が、彼女には意味がないようだ。

「マスター」

「ん？」

「うたわないんですか？」

ボーカロイド・初音ミク。彼女は歌をうたってくれる機械の人形だ。

――学校が終わった後の学習塾は夜まである。受験生も楽じゃないと思いつつ、俺は帰宅すると同時に自分の部屋に向かう。

ミクの電源は首の後ろに内蔵されている。機械なのにやや緊張しながらそこをいじると、閉じていた瞼がプィーンと開く。

「――あ、マスター」

「ただいま……つってもわかんないか」

「？」

「こう言われたら、お帰りって応えるんだよ」

「へぇ。わかりましたマスター」

疲れた体でも、女の子（？）の話し相手がいるだけでなんとなく元気が出る。記憶回路はあるから普通の人間と同じように会話は出来るのだ。流石にクソ高いだけの値打ちはあると思う。

「じゃ、昨日の続きやろうか」

俺がそう言うとミクは嬉しそうに頷く。ボーカロイドはある程度の感情も持っているらしく、ますます機械だというのを忘れがちになりそうだ。

「この曲、明るくていいですね。うたってたら楽しくなります！」

「そ、そう？」

作曲も歌詞も全部自分でして、それをミクにうたってもらう。インプットされてる音声が複合されて発せられるだけなのだが、この電子的な音になかなか味がある。

「でもあんまり人気ないんだよな、俺がつくった曲」

基本的に作った曲はネット上に公開したりするわけだが、世の中にはすごい人達がいっぱいいる。同じミクがうたってるはずなのに、俺の曲は全然ヒットしてくれない。

「でも私は好きですよ」

「ん？」

「だってマスターとうたってると楽しいですから」

そう言いながら笑うミクは本当に楽しそうな表情だ。が、これはただ設定上そうなるよう仕組まれているだけ……なんだそうだ。とてもそう思うことなんか出来ないが。

「ね、早く続きうたいましょう」

「あぁ」

勉強ばかりで余分な時間が取れなかった時は彼女はとても淋しそうな顔をしたが、逆にどんなに平凡な曲でもミクは嬉しそうにうたってくれた。俺は気分転換どころか、ミクにもっと色んな歌をうたってもらいたくて沢山の曲を考えた。

「……」

ミクが来てから何ヶ月か経って、俺は一枚の紙切れを持って部屋に戻ってきた。

椅子に座ってしばらくため息混じりにぼんやりしてから、いつものようにミクを起動する。

「……？　どうしたんですかマスター」

「ちょっとね……成績が落ちた」

今まで遊んだりするヒマもなく、ひたすら受験勉強に時間を割いてきていた。それが最近ではミクとうたうことに夢中になってしまい、当然ながら実質的な勉強時間が減っていたのだ。

「セーセキ？」

「まぁ、ミクの歌があんまり売れなくなったようなもんかな」

「元々あんまり売れないってマスター言ってましたけど」

ミクのツッコミに思わずガクンと頭を下げてしまう。

「そうだよなぁ……売れない曲ばっかうたわせて成績落ちたら目もあてられないよな」

「マスター、元気ないですよ？　ちょっと休んだ方がいいです」

ミクは気遣うように俺の隣に腰を下ろして、顔を見上げてくる。

機械だというのは百も承知なのに、綺麗に整った人間そのもののミクの顔を見て一瞬ドキリとしてしまった。

「い、いや。ミクの歌をちゃんとみんなに聴いてもらえるまで頑張らなきゃダメだ」

「でもマスターのセーセキ……」

「そんなの後から取り返せるって！　ミクだって色んな人に聴いてもらいたいだろ？」

本当はさっさと勉強しないとまずい状況だった。それでもミクがうたい出すとすごく楽しそうで、俺もそれが嬉しかった。ミクとうたっていると、他のことはどうでもよくなった。

でもそのツケはきっちり自分にのしかかってきた。いよいよピンチの状態になってきた俺は睡眠もほとんどとれず、一日のノルマを必死にこなしてフラフラしながら作曲を続けていた。

「ねぇマスター、今日はもういいよ。すごく疲れてるよ？」

「わかってるよ……あと少し。もうちょっとで出来そうだから」

俺はミクに心配されても構わずパソコンをいじっていた。相変わらずこちらも成果はなく、ミクは俺一人の前でうたってくれるばかりだった。

「マスターもう休んで。元気ないマスターとうたいたくないよ」

「そんなこと……ミクのためにやってるんだぞ！？」

苛立っていた俺はつい声を荒げてしまう。ミクはびっくりした様子で一歩後ずさった。

「……ごめん。でも俺はもっとミクに喜んでもらいたいんだよ」

隈のできた目をこすりながら言う。

「ミクが、好きだから……がんばろうって思っちゃうんだよ」

相手は機械だとわかっていても、彼女の笑顔を見ると嬉しくなる。自分はバカなんじゃないかと思いつつそう言ってしまった。

「……マスターは私を愛してるの？」

「う……ぅん」

いきなりミクがそんな言葉を口にして、俺は困惑しながらなんとか頷いてみせる。

だがミクの表情は笑ってもいなければ、悲しんでいるようにも見えなかった。

「マスターは私に期待してるだけだよ」

「……え？」

「私は初音ミクだけど、ミクじゃないの。ただの機械なの」

ミクが何を言っているのか解らなかった。そこにいるのはただの機械人形なのか、ずっと一緒にいたミクなのか、それとも違う“誰か”なのかすらわからなかった。

「私は何十万体もあるユニットの中の一体だから、みんな私と同じなの。私と同じ体で、私と同じ性格で、私と同じ声で」

ミクは無表情で喋っていた。聞き慣れたミクの声が、ミクの声じゃない気がした。

「だからきっとマスターは私じゃなくてもいいの。別の初音ミクが来てもきっと同じ。私が好きっていうのは、ユニットコード０１－Ｈ１２５７１４に何かを期待してるだけ」

「……やめろ」

苛立ちは消えていた。代わりに、泣きたくなるような怒りが体の底から湧き出すようだった。

「マスターが愛してるのは私じゃないの。私の形をしてる初音ミクという――」

「やめろよ！！」

俺は椅子から飛び出してミクにつかみ掛かった。その勢いでミクは床に押し倒される。人間より遥かに重い鈍い音が響き、ミクの一部からバチッと火花が散った。

「それ以上言うな……！」

「……ミクは」

その呼称は『初音ミク』というボーカロイドではなく、ミクである自分自身のことを示していた。

「マスターを好きになれません。マスターを愛することもできません。私は機械だから」

「ッ……！」

無表情のはずだったミクの目は、奥の方でとてつもない寂しさを放っているように見えた。

俺は静かにミクの胸倉から手を離し、傍のパソコンの電源を落とした。ミクはむくりと起き上がり、申し訳なさそうにうつむいていた。

「ごめんなさいマスター……」

「謝るなよ……謝ったら余計虚しいだろ」

しばしの沈黙の後、俺はミクに近付く。そして彼女の首の後ろに手をかけた。

「……」

「……」

ミクは何も言わない。俺も何も言えなかった。俺はミクの青い光をじっと見たまま、パチッと彼女の意識を絶った。

――あれ以来数ヶ月の間、俺はミクを起動することはなかった。ただ今まで通り、受験勉強に必死になって体を酷使した。

しかし、脳のどこかにできていた形ある空白はいつまで経っても消えなかった。俺は何かしらの現実に対してひたすら疑問を抱いてし

まった。

あれだけがむしゃらに取り組んだ勉強も、実際は身に入っていなかった。一年の月日が流れた結果、俺は人生の何一つを進展させることができなかった。受験は失敗だった。

「……」

冬の寒い自室の中で、俺はいつかのように茫然と椅子に座っていた。その部屋に青いツインテール姿はない。一年前から、部屋の奥に封印されるようにしまわれていたままだった。

色を失った、道も失った。することが全く見つからず、俺は気の向いたまま体を動かし、部屋の物置を開いた。

彼女は体育座りの体制で収納されていた。埃を被ってしまった髪は灰色にくすんでしまっていた。

俺はゆっくりと彼女を運び、壊れないよう慎重に立たせた。関節の動きが少しぎこちない。肌も汚れていたので、俺の服でそこら中を拭きまくった。胸やスカートの中も触ったが、やっぱり機械とは思えない質感だった。それがなぜか無性に哀しかった。

「……」

すっかり元通りになったミクは、初音ミクの姿のままで黙っていた。いつの間にか夕方になっていた薄暗い部屋の中で、細い首に手を回

す。

「――プィーン……」

ひどく懐かしい音がする。無意識に彼女に向かって口にする。

「ただいま」

「……お帰り、マスター」

うたってるわけでもないのに、ミクは微笑みながら答えてくれた。

その瞬間、ブワッと目元がぼやけた。

「マスター？　泣いてるの？」

「うん……なんでかな、ミクは機械なのにな」

ミクは俺の目元の滴を手で拭った。

「お前、手冷たいな。機械だからか」

「うん」

「そんな恰好で寒くないのか」

「機械だから」

ふふっ、と俺は吹き出してしまう。

「マスター、一年も一緒にうたわせてくれなかった。すごくさびし

かったよ」

「……それもインプットされてるから言ってるのか？」

ミクは素直に頷く。そしてあの笑顔を見せる。

「マスターとうたうのが楽しいの。私はそれしか感じることができないから」

「……」

「だから、マスターが楽しくなかったらミクも楽しくない。マスターがさびしかったらミクもさびしいんだよ？」

感情豊かなのはシステムのおかげだ。そのはずだが、俺はミクの気持ちを割り切って受け入れることが出来なかった。

「やっぱり好きだよ」

「……はい」

「うたおうか」

「うん」

パソコンを起動する。ミクに音声コードを繋ぐ。本当に何もかも一年振りだ。

「実はさ、ずっとうたって欲しい曲があったんだ。『ＨＡＴＳＵＮＥ』っていうありがちな短い曲だけど」

「私と同じ名前？」

「うん。字はちょっと違うけどな」

この一年間、胸の空白にずっと溜まっていた想いが頭の中で響いていた。しかしそれを声にしてくれる人がいなかった。

「うたってくれる？」

俺がミクを見ると、彼女は柔らかな冷たい手で俺と手をつないだ。

「マスターも一緒にうたってくれる？」

「……あぁ。もちろん」

――その後しばらくの間、ボーカロイドの曲を紹介するウェブサイトではある歌がちょっとした反響を呼んだ。さびしげだが温かいその歌は、初音ミクの放つ電子音で声高く謳われていた。

『誰かがよんでる

私の胸で

時が止まりそうなすがた

世界を映して

うたい

うたう

君をうたう

ここちよい声が

私をつらぬいて

色を失いそうな

暗い目の前で

ひかる

ひかる

愛と絶望がうずまく

君と私の手の中で……』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7348k/

HATSUNE

2010年10月10日01時01分発行